堕ちていく白百合　Ⅲ

K

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=19466598

R-18, 守エク霊, エク霊, 腐向け, ♡喘ぎ, 霊幻受け

EntsCat様（user/11852202）とリレーエロ小説作りました！
やっほーい！！
今後も続きますので、ぜひ読んでいってくださいね！
エンツさんの所でもお読みいただけます！

そしてひよたまさん（user/39563383）からめっちゃ素敵なファンアートいただきましたぁぁ！（掲載許可済）
ありがとおおお！！

【堕ちていく白百合】とらのあなで通販中です！
文庫本/416P/R18
pixiv掲載本編＋溶けない愛蜜糖＋書下ろし３編収録
ご興味のある方は下記URLよりどうぞ！
https://ec.toranoana.jp/joshi_r/ec/item/040031175393

各種捏造設定含みます。
設定＞良家に嫁いだ元・霊とか相談所所長のあらたたさんが夫を突然死で亡くして未亡人に！
悲しみに暮れ一人で自分を慰めたりして旦那に操を立てていたが、せっかく大事に守ってきた操をぶち抜かれて、ついでに指輪も奪われ大変だ！
日々色香を湛えて病的なまでにセクシーになっていき、本家をあらたたの色気で混乱させそうな勢いだ！
そしてエクボとの無理矢理ながらも逢瀬を繰り返して、その心の変

化を嫌でも感じざるを得ないあらたた。
ある日気分転換にと頼まれたお使いで久しぶりの開放感を味わい、リフレッシュを満喫していた時だった。
傍に止まる車。不埒者が現れて誘拐された？！どうなるあらたた！どうするｴｸﾎﾞ！

和装×生肌×仏壇×背徳感×大和撫子×兄嫁NTRの特盛大サービスのエロでございます。

登場人物
霊幻新隆＞良家の奥様。28歳。最愛の旦那を突然死で亡くし未亡人に。和装女装美人。良家の奥様らしく言葉遣いはお上品に。
九下部笑窪（エクボ）＞誠司の弟。35歳。道楽息子で兄と比較されて誠司に嫉妬している。霊幻を手籠にする係（えっ）
九下部誠司（モブキャラ）＞霊幻の最愛の旦那様。逝去済み。思い出程度に出てきます。

以下内容がふんだんに織り込まれておりますので、閲覧の際はご注意ください。
霊幻がめっちゃ奥様
霊幻が美人（美丈夫か）
霊幻が常に和装女装で浴衣も女物着ています（でも今回は男物着てます！）
エクボがNTRぶちかますけど今回は・・・切ない？
喘ぎがかわゆすかわゆす（♡喘ぎあります！）
モブキャラにtkb責めされてる描写あります
媚薬エロだ！！

上記ご参照の上、お読みくださりますと幸いです。

Table of Contents

堕ちていく白百合　Ⅲ

※※※EntsCatパート※※※

バチン、と白百合の茎を切る。
新隆は昨日の掃除で飾る為の仏花で余ったものを、自室の青磁の壺に活けていた。

エクボの無体。告白。九下部家のこと。遺産のこと。自身の忘れていた記憶。誠司が隠していた、忘れさせようとしていた事実。

何もしなければ、それらがぐるぐる頭の中を回ってひたすら思い悩んでしまいそうだったので、新隆は手慰みに花を活けていた。
「新隆さん、入りますよ」
「はい」
部屋の襖を開けて、思わず義母は絶句する。
うつつに魂が無いような悩ましいとろりとした表情をした新隆は、裾に控えめに鶴が飛ぶ黒い留袖の袖をまくって白い腕を晒しながら、美しい白百合を細い指で掲げている。
むせかえるような『オンナ』としての色気に、思わず義母は自分に男性器が無いことを感謝した。
男であれば、あやまちを起こしそうになるのも分かる、と義母は密やかに思う。
いや。
自分も既婚者で無ければ、どう考えたか分からない、と思って、義母は少しぞっとした。
「……少し、気分転換に外に出てはどうですか？」
そんな内面をツラの厚さで誤魔化して、名家の当主夫人は優しげに笑う。
「外に、ですか」
「ちょうど仏壇のお供えを入れ替えようと思っていたの。誠司の好きな物を是非買ってきてあげてくれないかしら」

「……そういうことでしたら、活けてしまってから行ってきますね」
「ええ、それで構いません」
じゃあ頼んだわね、と言い置いて誠司と新隆の部屋を出て、義母は息をつく。
あの色香は危険だ。九下部家全体に大嵐を起こさせかねない。
この際『誰でもいいから』、新隆を落ち着かせて欲しいと思う。
そう。
この際、笑窪でもいいから、と。
当主夫人は、密かに思うのだった。

※

化粧を落として、白い襦袢のまま、久しぶりに男物の薄墨色の長着を着て黒い角帯を締め、鮮やかな朱色の羽織に袖を通す。
新隆の蜜色の髪によく似合う、と特に誠司が気に入っていた組み合わせだ。そう言われていたのを嬉しく思い出しながら、草履を履く。
「いってきます」
財布と携帯、畳んだ風呂敷を懐に入れて、新隆は近所のスーパーに向かう。
久しぶりに出た町は明るくて、目に映る物が清々しかった。
（そうだ、九下部家だけが世界じゃないんだ）
外の景色はそんな当たり前のことを思い出させてくれて、外出を勧めてくれた義母に感謝する。
（……また外で働こうかな）
ずっと家に居るからエクボの好きにされてしまうのかも知れない。
新隆は少しずつ思考が整理されていく心地良さを感じていた。
（そうだ、エクボさんに相談所に来てたこと、訊いてみないと）
そう、１人で思い悩んでも答えが出ないことの方が多い。何でそんな単純な事を忘れてしまっていたのだろう、と明るい見通しがついてくる事が新隆は嬉しくなってきた。
（誠司さん。誠司。俺はあなたを心の支えにして、生きていける気

がしてきた）
そう思った時に限って、ふ、とよぎる嗅ぎ慣れてしまったタバコの匂いに、心がざわめく。
（今は、考えたく無い……）
新しい恋、なんて。まだ新隆の気持ちが、ついて行かなかった。
スーパーに着いて、俗世の音に気分が切り替わる。
（カップ麺とかも買って行こう）
久しぶりの買い物に、新隆の気は完全に緩んでいた。

※

「あら？新隆さんは？」
ついでにお使いを頼もうと義母が新隆を探していた。
「先ほど出て行かれましたよ」
お手伝いさんが応える。
「あらそう。……誰を連れて行ったの？」
見たところ屋敷の中で消えた人間は居なかった。不思議に思って義母はお手伝いさんに尋ねる。
「１人で出て行かれましたよ」
「なんですって！？」
義母が目の色を変える。
「どうして１人でなんて行かせたの！九下部家の本家の人間なんですよ！？！？」
「も、申し訳ありません」
「とにかく、お前、すぐ新隆を追いかけなさい。今すぐ、走ってです！」
「は、はい！」
お手伝いさんが玄関へ向かうのを待たずに、パタパタと義母は当主の執務室へ向かう。
「あなた！大変です、新隆さんが１人で買い物に行ってしまったわ！！」
「なんだい、騒々しい」
妻の声に訝しげに当主が顔を出す。

「新隆は男なんだから、そんなに気にする事じゃないだろう」
「貴方は最近の新隆の危うさを分かってないからそんな悠長なことが言えるんです！……笑窪！」
当主じゃ話にならない、と当主夫人は跡取り息子を探す。
「笑窪！何処です！！」
「笑窪なら、税理士と誠司が残した土地の話をしに行ってるが」
当主夫人ははしたなく舌打ちをしたくなる。
「こんな時にいないんですから──！本当にあの子は、間の悪い！」
新隆とのことだって、そうです。誠司にまんまと留守の時に横取りされて、と余計な事を言いかけて、当主夫人は黙る。
「とにかく、嫌な予感がします。男手も追いかけさせます」
「心配性だなあ」
「あなたは娘を持った事がないからそんなことが言えるんです！！」
当主はぱちくり、と目をまばたかせる。
「……新隆は息子だと思うんだが……」
余りにも下世話で、名家のお嬢さんでもある義母は、義父に『何故新隆を娘としても扱うのか』は説明出来なかった。

※

（ちょっと買いすぎちゃったな）
久しぶりの買い物で、新隆は楽しんでしまい、風呂敷に入りきらないほど物を買ってしまった。
スーパーで袋を買い足し、両手に持つ。
るんるんと草履でしなやかに歩いている新隆は、自分がその艶やかさで人目を惹いている事に気が付いていない。
そして、その無防備さにも。
だから狭い道で、黒いベンツが幅寄せしてきた時にも、
（マナーの悪い車だな）
としか思わなかった。

前後を塞ぐようにベンツのドアが２つ開いて。

「えっ？」
両手が塞がっている新隆が一手遅れた間に、中から出てきた高そうなスーツを着た男たちに両手と両足に手錠をかけられ、口にガムテープを貼られた。
「ん゛ーっ！！」
暴れようとした時にはもう遅い。荷物は無残に道路に落ち、新隆は男達に持ち上げられて、トランクに押し込まれていた。
「若奥様！？」
それを見ていたお手伝いさんが悲鳴をあげる。
「待ちなさい、狼藉者！！待ちなさい！！！！」
「急げ！！」
サンダルで走ってくるお手伝いさんから逃げるように車は急発進する。
「若奥様ー！！！！」
お手伝いさんはへたり込み、呆然と車を見送る。
「……こうしちゃいられない」
が、腐っても九下部家の女中である。
車のナンバーはしっかりと覚えた。
足を叱咤して立ち上がったお手伝いさんは、全速力で走って本家の屋敷に戻った。

※

お手伝いさんの報告を聴いて、当主夫人は卒倒しそうになる。
「け、警察に……！」
だが、当主は険しい顔をしている。
「そのナンバーは……」
当主は手帳を手繰って、ため息をつく。
「やはり、分家の車だ。警察に言うのは待った方がいい。九下部家の名に傷が付く」
「あなた、本気ですか――！？」
「その代わりウチの手の者を助けに向かわせる。落ち着け、お前」

ぽろぽろと当主夫人の目から涙が落ちる。
「新隆、わたくしが買い物になんて行かせなければ――！」
くずおれて号泣する夫人に、当主は困ったように頬を掻いた。

※

（ヤバい、ヤバいことだけは分かる）
新隆は揺れるトランクの中で、頭を必死に働かせる。
長いドライブの間に、何とかベロで押しのけて、口に貼られたガムテープは外せた。
（携帯で、助けを――）
手錠で不自由な手で、四苦八苦しながら携帯を懐から取り出す。
何故か、確実に助けてくれそうな人は、新隆には１人しか思い浮かばなかった。
カタカナなので、電話帳の１番上に表示されている名前。
（出て、出て、出てくれ――！）
プルルル、と呼び出し音がかかる。
『よぉ、どうした？寂しくなったのか？』
「た、助けて――！うぐっ」
揶揄うような声に、必死に叫んだ言葉は、トランクを開けた手に遮られる。
「新隆のやつ、助けなんて呼ぼうとしてたぜ」
「危ないところだったな」
二十代後半の男たちが、笑いながら携帯の通話を切る。
「立て。こっちに来い」
山の中の豪華な洋館。その中に新隆は車から降ろされ、連れて行かれる。
「興味はあったんだよな、本家の連中がそんなに夢中になる身体ってやつに」
笑いながら語られる不埒者の言葉に、ぞ、と新隆に悪寒が走る。
「お前みたいな胡散臭いやつに本家の財産を持って行かれてたまるかよ」
洋館のベッドルームには、すでに何台かのカメラが設置されてい

て。
「これからお前を犯して撮って、それをネットにバラまいてやる。もう社会的に殺してやるよ──身の程知らずにはぴったりの末路だ！」
ひゅ、と。
新隆の喉が鳴った。

※※※Ｋパート※※※

「・・・は？」
電話の主人は新隆。それが、唐突に「助けて」とだけ言い、ぷつりと途切れた。スマホはもう、うんともすんとも言わない。
一瞬呆けていたが、すぐに状況を察する。
「あんの馬鹿・・・何やったんだ！」
理解した。人攫いにあったのだ。あれだけあの日、仏壇の間で諭したのに事の重大さをわかっていなかったようだ。ある意味俗世からやってきて匿われていた「箱入り娘」なのだ。もっと注意をすべきだった。
だがそんなこと言っていられない。事は急を要する事態だ。しかしあの通話だけでは情報がわからない。切断前に聞こえた輩の声は新隆以外に二人。
「少なくとも2人は誘拐に関わってるっつうことか」
近くにいる税理士がメガネをずり上げながらはぁ？という顔をしてこっちを見てくるが、状況を理解したようで、何か手伝えないかと身を乗り出してくる。この税理士も九下部家に関わる者として、身の危険が生じた時などは匿ってもらったりしている恩義がある。
「悪りぃなセンセ。じゃあよ、ここに連絡して場所特定するように言ってくれ。なる早でだ」
そう言ってエクボがサラサラとメモに電話番号を書き、煙草を灰皿に押し付ける。
「俺様は現地に向かいながらその特定ポイントを待つ」
カツカツ、と忙しく黒の革靴の踵を鳴らして、漆黒のスーツのジャケットをばさりと羽織りながら事務所を出ていく。

焦る。心臓が妙に早鐘を打つ。
「クソ・・・！」
停めてあった黒光りする大型バイクにエンジンをかけ、同色のヘルメットを装着する。跨るのはCB1300SU●ER Fで、エクボの日常用の愛車だ。まさかこれで人攫いの現場へ乗り込むことになるとは思っていなかった。
情報はないとはいえ、攫う連中はあらかた目星はついている。
「なんかあったら容赦しねぇぞクソ共！！」
焦る気持ちをあらわすかのようにブオン、とアクセルを回し、タイヤをギュルギュルと回転させ、その場をあとにした。

「・・・・・・」
新隆は冷静に、状況を確認する。
おそらくはクイーンサイズほどの大型ベッドの上、手には手錠。
さっきまで足にも手錠がかけられていたが、それが外されて足枷が装着され、左右の天蓋の柱から伸びるチェーンで繋がれている。
ベッドの周りには、左右、中央と合計三台のカメラが三脚で設置されており、全て新隆にレンズが向けられている。機械とはいえ映像機器の視野に入るのは、気持ちが悪い。
「何するんですか。俺を捕まえても何もなりませんよ」
こんな危機的状況は相談所以来だ。あの頃はよく無茶をして茂夫や芹沢に怒られていたな、と思い出す。
だが今回は勝手が違う。身の回りに超能力者はいないし、自分は無力で、九下部誠司の男妻だった、という立場なだけで攫われて来ている。目的は身代金や相続権利などだろうが、それに加えて手篭めにしようとしているということだ。
（最悪だな）
しかもやり方がいやらしい。金持ち連中のくせにやることが卑下ている。こんなの庶民の脅しと大して変わらない。ただでさえ一度記者会見を開くような詐欺騒ぎを起こしていて顔も世間に知れ渡り、その上名家に嫁いだとなれば社会的抹殺など火を見るよりも明らかだ。だから、なんとしてもそれだけは阻止しなければならない。自分の社会的地位を守るため、そして社会でまた仕事をする時に影響

がないように。
はぁ、とわざとらしくため息をついて、心底呆れたように言ってやる。
「あんたら、九下部家の人間ならこんなやり方じゃなくて、もっと別にやり方あったんじゃないんですか」
「あぁ？何殊勝なこと言ってやがんだこの雌犬」
「しかも話し方がすげえ下世話だなぁ奥様の割によ」
新隆は彼らの物言いにクスクスと笑う。こんな状況下でいつまでも上品な奥様を気取っていられるか。
「いやぁ？だってあんな黒塗りベンツなんてその辺でそうそう見ない車ですし？あんなの目立ってしょうがない。ナンバーだって覚えりゃすぐにどこの誰かなんてバレるし」
世間を舐めちゃいけませんよ、と嗜めるように新隆はため息を吐きながら言う。
「下世話なのはあなたたちです。今頃警察と本家が動いて俺を探し回ってるとおもいますが」
ここで彼らに本家という単語を打ち付けておく。少しでも焦る材料になるように。だが、卑下た笑い声が部屋の中に響いた。耳に入るのも気持ち悪い。
「聞いてないか？警察は九下部の犬だ。体裁を守りたいがために通報はしないし揉み消す」
それに、とひどく醜悪な笑みを浮かべて新隆を覗き込んでくる。
「この屋敷は本家の人間で知る奴はいないし、電波も入らない。仮にあんたが発信機をつけていたとしたって、その電波は本家には届かない」
「・・・え」
「ここは元々な、九下部家の裏取引や表立って言えない事やあんな事なんかを色々仕切る館でね、普通の建物じゃねぇんだ。ここに交渉に来る人間も守るためにあえてそういう作りになってんだよ」
「そ、んな」
冷や汗が流れる。予想外の事態になってしまった、と今更理解し始めた新隆の心は、次第に冷たく凍りついていく。
そんな状況では、本家の人間も知ることのない館であれば、エクボ

なんて来てくれるはずが、ない。
「待て！それでも俺をなんとかしたって何も起こらないぞ！俺はもう」
そこまで発言して、はた、と言葉を止める。
誠司は死んだ。俺はもう誠司の妻じゃない、と。
自分でその事実を、逃げ口上とはいえ口に出そうとした。一気に広がる苦味が、きつく新隆の心臓をぎゅうと抉る。だが、言わなければいけなかった。
「・・・俺はもう、誠司の妻じゃ、ない。誠司は、死んだ」
ぎゅっと唇を噛んで目を閉じて、自分の発した言葉の痛みに耐える。時には犠牲も必要だとこれまで冷静に、冷徹に事を運んできた相談所時代。それが自分自身であればどんなことでも甘んじて受け入れてきた。だけどこの言葉は自分の中から誠司を引き剥がす言葉でしかなくて、こんな時なのに苦しくなる。
その様子を見た不埒者がゲラゲラと笑う。
「あーかわいそー！さっきまであんなに強気だったのに！」
「誰だよ泣かしたのぉ！あはは！」
「かわいいおヨメちゃんだなぁー！」
下品な笑い声で耳が満たされる。なんとも耳障りだと思いながらも影響を受けないよう流していく。
笑われるのも、からかわれるのもどうでも良い。どんなに自分が苦しくとも、現実と私情は分けなければこの機に勝ち目はない。だが、この状況は流石にまずいと確信した。
このままでは、確実に犯されてしまうだろう。
なんとか話し合いで解決できればと考えて必死に頭を回す。だが。
「なに一生懸命考えてんの？とりあえずこれ一杯キメといてよ」
考える時の無表情になる癖が仇となったようで、透明な液体を湛えた上質なショットグラスを眼前に突きつけられる。明らかに不審なものであるそれは、透明ではあるもののほんのりと甘い香りのする、少しとろりとした見た目をしている。
「なんだこれ、酒は！」
焦って手錠が嵌められた手をガシャガシャと鳴らして抵抗する。その様子を見てまたゲラゲラと笑われる。

「酒じゃねぇよぉ？」
タプン、とショットグラスを揺らされる。また甘い匂いがふわりと香る。
「ちょっとばかし気持ちよくなるおくすりでーす」
「はいお口あーん」
「おい、後ろ押さえとけ」
どんどん近づいてくるショットグラス。抵抗しようにも羽交い締めにされ、手元は手錠で拘束されたまま拳を繰り出すこともできない。
「や、やめろ！っぐ！」
後頭部をがしりと押さえられ、あごをぐいと掴まれる。無理やりこじ開けられた口の中へ、グラスを傾けてトロリと流し込まれるその「くすり」は、舌に触れた途端に熱く優しく粘膜を支配し、じんわりと染み渡って体内へ吸収されていくのがわかるほどにその効果が身体を巡るのが速かった。
口の中で広がる砂糖をそのまま液体にしたような強烈な甘さに、吐き出そうともした。しかし、顎を掴まれたままグイと上を向かせられる。
「んぐぅっ」
勢いで少し喉の奥に飲み込まれてしまうくすりが、食道の粘膜からじわりとまた焼けるような熱さを伴って、胸から広がっていく。それ以上飲み込んでしまわないように必死で喉を閉じる。ところが。
「うわ、こいつの喉すごい白いな…」
そう言って一人が新隆の喉仏に舌を這わせて舐め上げた。
「かはッ？！」
くすぐったさと気持ち悪さに思わず咳き込んで、喉が開いてしまう。その衝撃でごくりと、待ち構えていた液体を飲み下してしまった。大量に流し込まれたそれが胸を通り、胃に達して熱さが消えていく。不穏な感覚に新隆は心地の悪さを感じて青ざめる。
「あ、飲んだみたいだぞ」
「あーあ、飲んじゃったらもう終わりだなぁハハハ！」
「それなぁ？とある製薬会社の非合法の媚薬なんだよ。ちょうど実験体が欲しかったらしくてなぁ？」

「？！嘘だ！この世には媚薬なんて存在しないと言われてる！」
咳き込んだ時に溢れたくすりが口の端から流れて、とろりとあごを伝う。羽交締めの状態は継続しており口を拭うこと叶わず、それでも新隆は媚薬の存在を否定する。そのように言われることによって単なる砂糖水をプラシーボ効果でその気にさせるつもりかもしれない、と。
「いや？残念ながらこれは本物だ。九下部には金と権力はあるからな。それさえあれば大抵の物は作れる」
「だなぁ。媚薬もなぁ？」
「嘘だ！ハッタリだ！」
「嘘かどうかは身体に聞いてみな？そろそろ効いてくる頃だろ」
そう言われて、すぐだった。
ぞくん、と身体の奥底から蛇が這いずり回るように、背筋や腰、胸の奥を体内からそろそろとなぞっていくような覚えのある感覚が全身を直走っていく。それも弱い物ではなくて、確実に性的感覚を誘発することを意図されたもので、「薬の効能」として名打つならばそれは素晴らしい力を発揮していた。
「あ・・・っ・・・なんだ、こ、れぇっ・・・！」
まるで注射で粘膜に直に麻酔薬を打たれた時のようにその効果の広がり方は迅速で、数秒前までじんわりとしていた感覚がどんどんとその比ではなくなっていき、炎で内側から炙られるように熱く昂っていく。血流が一気に増して体温が上昇し、その体温と体内の感覚を必死にいなすように呼吸が荒くなる。
「うわぁ、効き方エグくない？これ」
「いや、個体差あってもこのくらいはなるって聞いてたから大丈夫なはずだ」
「これが、何時間くらい持つんだ？」
「んー、どのくらいだっけなぁ？はは、忘れたわ」
でも、と不埒者がニヤリと笑って新隆を見る。
「夜が明けるくらいまではいけるんじゃね」
「ー？！」
その回答は絶望的だった。このどうしようもなく身体を蹂躙してくるという効果が、あと何時間新隆の肉体を辱めるというのか。

（少なく見積もっても十二時間だと？！）
ありえない。現代の医療でもそんなに効果を持続可能な医薬品は存在していないはずだった。いや、あるいは様々なものがすでに存在しているのに、法律などの関係で表に出せないものの方が多い、ということなのだろうか。
（いや、そんなこと考えても埒あかないだろ！）
聡いからこその悪癖が出る。つい思考で解決しようとしてしまうが、今はそれどころじゃない。
もう口を開いてもまともな会話が出来そうにない。くすりが回り切ってしまったのか、内側から発せられるうねりが全身の力を奪い、足腰をなし崩しに使い物にならなくしていく。新隆は無駄だとわかっていても悶えずにはいられず、膝を擦り合わせるようにして抵抗をし、シーツの上を白足袋が何度もずりずりと滑る。
「は・・・ぁ・・・！」
赤面ししっとりと汗をかく新隆の様子を見て、ごくりと喉を鳴らす音がする。
「おいイトウ、俺ちょっと触るわ」
イトウという偽名で呼ばれた男はニヤリと笑って、どうぞと返事をする。
「タカハシさん、ずっと興味あるって言ってたすもんねぇ」
どれどれ、とタカハシの偽名を名乗る男が、背後から新隆のうなじや鎖骨を指でするりと撫でつけた。途端に普段なら感じないようなぞわぞわとした異常なまでのくすぐったさを感じてしまい、肩がぞくりと震える。
「っさわ、んな、ぁ！」
神経過敏になっているのか、感覚が普段の何十倍も増しているようで、少し触れられただけで身体がぞくりと波打つのがわかる。正直、身じろぐたびに肌に擦れる襦袢の感触も、今の新隆にとっては危険な匂いしかしない。
「あーいい反応ですねぇ奥様ぁ。そういうの煽るって言うんだぜ？」
そう言うや否や、うなじを滑っていた手が長着の襟の間をぬい、胸の中に挿し入れられた。瞬間、偶然にも乳頭を掠めた指先に敏感に

反応してビクンと震えてしまう。
「あ、ッ！」
「あれ、イイとこ当たったんだ？どれどれ」
「や、やめろ！」
着衣の内側でもぞもぞと動く手に目を強く閉じるが、そうすると肌を弄る手の感触に集中してしまい、余計に感覚を拾ってしまう。探し当てられた乳首は触れられた感触に硬くなり、まるで触れて欲しいとでも言うように主張をしてそそり立ってしまう。だが指は焦らすようにその突起には触れずに、わざと周りをするすると撫でて肌の感触を楽しんでいる。
「こいつの肌すげえスケベだよ。ちょっと脱がすわ」
「おお、やっぱカメラ回しといてよかったな。結構映えそうだし。あ、サトウ、脚触っとけよ」
「やった！ご相伴に預かりますぅ」
「いや、だぁ！っさわるなぁ！！」
くすりで浮かされた脳みそで必死に叫ぶも男たちには届かない。彼らには新隆の抵抗の声すら甘美なスパイスとなって楽しみの一つとなってしまっている。
タカハシが羽織ごと長着の襟を掴み、ぐいと広げて胸部を肌蹴る。着物が乱れて着衣の機能を一瞬にして失い、薄墨色の布からのぞく乳色の肌、そしてやはり薄褐色から桃色へと変色をするその乳首がまるで包皮を取り除いた甘い果実のようにそこにあるのだった。
「やだ、っ！やめ、ろぉ！」
悲痛な叫びも虚しく、手が乳首に伸びる。腋下から薄い胸筋をいやらしく弄って、わざと揉みしだく。
「奥様なんですからおっぱいモミモミも気持ちいいんでしょ？」
「ぃやぁっ！ちが、ぁ！」
「脚もすべすべですよ、すごいなこいつ」
「あぁぁっ」
誠司にもよく悪戯で揉まれたり、親戚共にセクハラで揉まれたりもしたが、そんなものより数百倍悪質な弄られ方をして新隆は息も絶え絶えだ。しかも今はくすりで相乗効果ときている。
同時にサトウが弄るのは新隆の脚。足枷が嵌められた足首からふく

らはぎ、膝裏へと指を滑らせ、長着の合わせに手を割りこませて
じっとりと脚元を開放していく。閉じていた膝は力が入らなくな
り、あっさりと割開かれて、「ご開帳〜」と揶揄う声と共にぱかり
とあらわにされてしまう。大胆にも寛げられてしまった部分には、
今の状態では心許なくなってしまった、少ない布地のシンプルな黒
いTバックがゆるく立ち上がった陰茎に押し上げられ、角度を変え
れば根元や陰嚢などがチラリと見えてしまうほどだった。
サトウの手がねっとりと、あらわにされてしまった白い太ももを撫
で、するっと内股に手を這わせる。でも股間には触れず、膝頭や
腿、帯のきつく巻かれた腰骨を嬲るように触れていく。性感を煽る
触り方をされ新隆は啼くが、それで止まれば御の字というものだ。
「気持ちいいですかぁ？じゃあこっちでも遊ぼうねぇ」
「あぁっいやだああ！」
胸を揉みしだいていた手が思わせぶりに乳輪を撫でたかと思えば、
きゅうっと両乳首を摘み上げてくる。その感触は最近エクボに散々
弄られたり誠司に愛撫されたものとは違って気色悪いのに、鋭い快
感がビリビリと全身を駆け抜けて下腹に重くのしかかっていく。
「あぅ、やぁ、いや、だ、ぁんっ」
摘み上げられた乳首はコリコリと指先で遊ばれて、否定の喘ぎを全
て嬌声へと変えていく。太腿への刺激も相まって、喉から漏れ出す
声は甘い響きにとって代わり、三人の不埒者たちの鼓膜を無遠慮に
舐る。もっとその喘ぎを堪能したいとギラつく欲望が、乳首を弄る
手を止めることを許さない。捻りを加えてやわやわと擦られていた
そこが、今度は先端を爪でカリカリと抉られ、指の腹ですりすりと
撫でられる。
「だっ、めぇ！あぁ、それ、ダメぇ！」
「あ、先っちょ好きなんだ？かーわいい」
「やだ！やだぁ！あんんっ」
まつ毛に涙の粒を湛えて、眉根を寄せるその顔は、ほんのりと上気
して小刻みに熱い息を漏らす。ぶつけられる快楽に時折抵抗するよ
うに手錠や足枷がガシャリと鳴って、胸を捩って啼く。だがその様
相は彼らを煽る材料にしかならない。
どんどんと熱くなる身体。くすりが服用後よりも更に効果を発揮さ

せ、同時に与えられる乳首への刺激も増して、下腹部の疼きがずくりずくりと強くなっていくのを感じる。
「いや！やめて、いやだ、んああ！」
これ以上弄ばれたら際限なく絶頂を求めてしまいそうで恐ろしくなるも、肉体は真逆の方向へと突っ走り、新隆を高みへ誘おうと感度をぐんぐん増していく。
「うわ、なんかすごいエロくなってきてますよ、カメラ映えヤバすぎる」
映像確認をしつつ、スマホでも撮影していたイトウが、パンパンに膨らんだ自身の股間を摩りながら興奮気味に笑う。動画を撮影したり、新隆の乳首や股間にクローズアップして写真をバシャバシャと収めたりして、撮ったものを見直している。
「イトウ、お前も触っとけよ、役得ってもんだぜ」
「いいんすかぁ？じゃあ俺乳首舐めたいです」
そう言ってイトウが解放された乳首をすかさず、唾液をたっぷりと含んだ舌でべろりと舐め上げた。驚いた新隆の声帯が鋭い嬌声を上げた。同時にビクビクと胸が鞠のように跳ねた。
「ひぃぁあ！」
「あれぇ？あらたかちゃん、指よりお口でしてあげた方がもしかして感じるぅ？」
「やっやめて！やだぁ！」
「これどう考えても嫌じゃないよなぁ」
クスクスと笑いながら口に含み、歯で甘噛みをして舌先でゾロゾロと乳頭を舐る。それが片方だったのが、太腿を触っていたサトウまでもがもう片方の乳首を口に含んで舐め、舌と唇で愛撫を施し始める。今まで体感したことのない、両乳首を一度に舐られるという刺激を与えられ、新隆は脳の神経がショートしそうなほどにバチバチと火花が散っているように感じていた。
それぞれの乳首から与えられる粘膜で犯される感触を、イヤイヤと頭を振り乱しながら涙をこぼして熱い息を小刻みに散らす。
「いや！やっ、あんっ！ダメェ、もう、あぁあ！」
意味をなさない声を出して抵抗しながら、悶えてシーツを蹴る。だが白足袋越しに足裏をくすぐるシーツの感触すらも甘い痺れとなっ

て、神経を通じて腰に蓄積されていくのだった。
今や何もかもが、新隆にとって快感の火種となっており、何をどうすれば治るのかがわからない。考えられない。そして。
「やめっほんとにやめて！！だめぇ！！」
新隆が今までになくガシャガシャと手錠を鳴らして暴れ出す。
「放して、くれっ！いやだ！！いやあ！！」
「え、やめるわけないでしょ」
笑いながらタカハシが言い、うなじにべろりと舌を這わせる。それがとどめとなったのか、新隆がぐんと仰け反って白い胸と喉を天に向けて、えびのように反った。
「いやだあああ！！イぅううう！！」
高い悲鳴と同時に身体ががちりと強張り、ビクンビクンと大きく痙攣して脚がビンと伸びた。その反応は絶頂のそれで、驚きと共に股間を見やる。乳首に夢中になっていて気が付かなかったが、押し上げられたTバックの黒い布地が、鈴口から吐き出された白濁をドクンドクンと染み出させ、射精のたびにその布地をじわり、じわりと盛大に濡らしていく。黒地でもうっすらと見える濁りが陰茎をずぶずぶと濡らして、下着はもはやその役割を放棄していた。
「うわ！乳首イキしてる！すごいよあらたかちゃん！」
そんなの指摘されなくても自分が一番よくわかっている、と涙が溢れる。完全な絶望を叩きつけられた瞬間だった。
「ちんこ触ってないのにすごいな・・・これが九下部を狂わせる男妻かよ・・・」
「じゃあもっと楽しませてもらおうか」
「やめろぉ・・・！」
絶頂を迎え絶望で埋め尽くされる脳みそで、必死に届かない助けを乞う。鼻水を啜りながら、むせながら、ひりついた喉で声にならない助けを願う。その相手は、真っ先に脳裏に浮かんでしまったのは。

「　　　　」

不意に、バイクのエンジン音が聞こえてきた。その音はやけに響き

渡り、新隆を凌辱していた三人にも、新隆にも聞こえるほど、はっきりと耳に落とされる。確かに屋敷の廊下は閉鎖的な空間になっているが、こんなに音が響くのも珍しく、不穏な気配さえ感じてしまう。だっておかしいのだ。バイクは普通外で乗り回るものであって、屋内で走り回るものではない。だから屋敷内でエンジン音が聞こえるわけがないのだ。
まるで、異質なものを迎え撃つ前の落とし所のない空気そのものだ。
「え、今日この屋敷・・・俺たち以外使わないはずだろ」
タカハシが怪訝そうに言う。イトウが立ち上がり、部屋の扉へ寄る。すると。
ブォン。
ドアの前で止まるエンジン音。そして微かな靴音と共に少し間を置いてから、コンコン、と丁寧なノックの音が聞こえる。
「・・・・・・」
静まり返る室内と、ドアの向こう側。そして。
コンコンコン。
今度は三度のノック。静まる空間。次の瞬間。
「かくれんぼしてるつもりなら、このドアぶち破るぞクソども」
その言葉と同時にバイクのエンジン音が鳴る。ブオン、とアクセルをふかす音がして、キュルキュルキュルとタイヤの摩擦の激しい音がする。そのまま、屋敷の重厚な扉がバイクに蹴破られ、バリバリと金具が飛び、バタァン！と入り口を解放したのだった。扉近くで様子を伺っていたイトウはその時に巻き込まれ、無惨にもバイクに轢かれて床に伸びている。
「よぉ、カチコミに来たぜぇ？」
グルングルンと唸るバイクのエンジン音。その黒光りの魔物に跨るのは、エクボだった。ほんのりと光の加減で緑色に光るその独特の眼光でギロリと不埒者を一瞥する。
「返せ。そいつぁ俺の嫁だ」
「え、エクボさん？！」
タカハシが素っ頓狂な声をあげる。サトウがあたふたとしてタカハシとエクボを交互に見やる。

「表のSPは？！それに」
「なんでここがわかったか、か」
よ、っと唸り続けるバイクから降り、カツカツと距離を詰めるエクボ。そしてベッドに横たわる新隆を見て、その眼を怒りに染めてギンと睨め付けた。
「それがお前らに、関係、ある？」
「ひ、っ！」
「な、なんだこいつ・・・！」
エクボが手をコキコキと鳴らしながら、三脚のカメラからテープを取り出し、指でほじくって黒い帯をビィ、と引っ張り出す。そして力任せにブチンと引きちぎり、撮影していたカメラも革靴でガシャンと踏み潰す。それを三台分こなし、右手にぶらぶらとぶら下げていた漆黒のフルフェイスヘルメットをガシリと掴んで、タカハシとサトウに詰め寄る。
「これで新隆を撮ってたのかよ。まったく趣味悪りぃぜ」
「おいテメェふざけんなよ！せっかくの機材を！」
「サトウやめろ！」
タカハシの制止も聞かず、サトウがエクボに殴りかかる。だが飛んで来た右ストレートをすいっと避けて、そのままサトウの後頭部にヘルメットをガツン！と振り下ろした。ゴキ、という鈍い音とかはっと一声あげて、その場にどうと倒れたサトウは、白目をむいて床に突っ伏して気絶していた。おそらくは頭蓋骨陥没くらいいっていそうだ。
「残るはお前だ、タカハシ？だっけ？」
クツクツと笑うエクボのその顔は目が笑っていない。そしてまたギロリと怒りを滲ませて鋭い眼光を向ける。襟元を掴んで引き寄せ、悪魔のものかとも思えるような重低音を耳に響かせる。
「お前もこうなりたいかぁ？」
「・・・・・・！」
「なぁ？」
わかってるだろうな？とその憤怒のオーラを纏う無表情に右手をくいっと出され、まるで洗脳でもされたかのように素直に差し出される要求物。SDカード、スマホをしっかりとひとつひとつ確認する

と、エクボがスーツの胸ポケットへと仕舞い込む。
腰を抜かしてへたりと座り込むタカハシを上からエクボが見下ろす。その腰砕けになった太腿に踵をぐいと押し当て、淡々と言葉を吐く。
「このデータは九下部のホワイトハッカー共にチリひとつ残さねぇように綺麗に掃除してもらう」
「う、っ」
「殺さずにはいてやるよ。だがタダで済むと思うな」
それだけ言って、太腿をバキン、と踏みつけた。骨折した音だった。
「ああああああ！！！！」
痛みと衝撃にもんどり打つその様子を冷ややかに見下ろしながら、言葉を吐き捨てる。
「かかりつけの医者にでも診てもらえ。あぁ、あと俺様からやられたと言ってもいいけどよ」
ニヤリとエクボが極悪な笑みを浮かべる。
「その後の人生の保証は無いと思えよ？」
「・・・・・・ひアアア！！！」
あまりの恐怖からか、タカハシが泡を吹いて気絶し、その場に突っ伏して倒れてしまう。情けないことに股間をじんわりと濡らし、失禁していた。
「・・・はぁ、馬鹿どもが」
持っていたヘルメットを床に下ろして、タカハシのポケットから鍵を取り出す。チッと舌打ちしながら、新隆に向き直った。横たわる彼の側に静かに腰を下ろして、乱れた着物を直してやる。
「新隆」
「えく、ぼ・・・」
「遅くなってすまねぇ。今解放してやるからな」
手錠と足枷をカシャリと外して、拘束痕を確認する。可哀想なことに、悶えた時の衝撃で食い込んだ金属の痕が赤く擦り切れて残ってしまっており、うっすらと血が滲んでいる様子もあった。
「こんな・・・もっと早く来れていれば」
悔しげに顔を歪めるエクボ。だが新隆は思考がまともに働かない。

息を荒げ、虚な潤んだ瞳で頬を赤く染め、震える白い手をエクボに差し出す。
「った、す・・・け、てえ・・・」
「？！新隆？お前一体・・・」
新隆の異常な反応に肩を抱く。するとビクンと仰け反って涙をぼろりと流され、驚いてしまう。
「あぁぁ！だ、めぇ・・・！」
周りを瞬時に見渡して、目に入ったのはショットグラス。それを引っ掴んで香りを嗅ぐ。覚えのある香りに目を顰め、くそ、と声を漏らしたエクボはなるべく刺激を与えないように新隆を抱き上げ、屋敷の廊下をカツカツと早足で歩いて行く。
あの薬を使われた、とエクボは奥歯を噛み締める。奴らが使った「くすり」は、エクボが本家から爪弾きにされていた時に、この屋敷に赴いて製薬会社と交渉を行なったものだった。その時にちょっとした行き違いがあり、左耳を欠損する小さな事故が発生した。それはいいとして。
自分が蒔いた種。それがこんな形で新隆に巡り巡って降りかかってしまった。
おそらく新隆は「人体実験」の名目でも攫われていたのだろうとおおよその察しがついて、反吐が出る思いだった。それを避けるために耳を欠損するような対立をしたと言うのに、自分が情けなかった。
エクボは早く新隆を助けたい一心で、不埒者たちが乗り付けていた車に新隆を乗せ、その屋敷を足早に去った。

※※※EntsCatパート※※※

屋敷の門前にクルマを止め、エクボはフラフラになっている新隆をそっと助手席から家の中へエスコートする。
「……その顔はヤベェな」
媚薬で発情した新隆の顔は、誰の目にも毒だった。エクボは自分の黒いジャケットを脱いで、ベールのように新隆に被せてやる。
「ほら、もう家についたから。もう大丈夫だからな」

エクボは新隆を支えながら彼の部屋に急ぐ。このままでは身体がつらかろう、と。
「新隆、エクボ！ああ、良かった……！」
が、当主とその夫人がそれを意図せず阻んでしまった。
「新隆は無事だったんでしょうね、笑窪？」
「おふくろ、そう見えるか？それともこう言えばいいか？『取り敢えず貞操は無事だった』ってよ」
「ま、まぁ、なんてはしたないことを……！」
「……見ての通りだ。媚薬を盛られてる。……しばらく新隆の部屋には近寄らないでやってくれ」
「……分かりました」
チッ、と当主が舌打ちする。
「こういうことは誠司なら起こる前に対処していた。本当にお前は変わらず出来損ないだな」
「な……っ！」
エクボが怒ろうとしたのを止めようとして、よろけた新隆がジャケットを落としてしまう。転びかけ、新隆は義父の胸にしなだれかかる形になってしまった。
「お義父さま、エクボさんは私を助けてくださったのに、そんな酷いことをおっしゃらないでください……」
新隆の潤んだ目、紅潮した頬。
息子たちを魅了した、その色気を間近で初めて食らった義父は、硬直、赤面した。
「お、おぉ……」
戸惑う義父から新隆を引き剥がして、またエクボはジャケットで顔を隠させる。
「お前な、今自分がどんな顔してるか自覚しろよ？」
「え……？」
戸惑う声まで甘く掠れているのに、義母とエクボは頭を抱えた。
「そんなわけだから、こいつは部屋にこもらせるからな」
「お、おぉ」
「ほらっ、あなた、いつまで惚けているんです！当主のお仕事がたまってましてよ！」

当主は夫人に追い立てられて、惚けたまま執務室に入っていった。

※

エクボは新隆の肩を抱いて支えながら、使用人からも隠すようにして彼の部屋に連れていく。
「もう大丈夫だからな。お前の部屋からは、お前が出てくるまで人が近寄らないようにしておく。……俺様も行かないようにするから、落ち着いたら出てこいよな」
エクボが襖をしめて、新隆は１人きりになった。
「……っ」
媚薬のせいで少し動くだけで腹の奥が疼く。新隆は、そろりそろりと性器に手を伸ばした。汚してしまった下着を脱ぎ捨てて、身体に渦巻く熱をおさめるために性器をしごこうとする。
だけれども。
不埒者どもたちの笑い声がフラッシュバックして新隆を脅かしてきた。
「ぁ……あ、ぁっ」
こわい。だれか。
そう思った時に、被せられていたジャケットから、ふわりとエクボのタバコの匂いがした。
『大丈夫だ』
「ェク、ボ、さん……」
新隆はジャケットをかき抱いて自慰をしようとする。
「う、うぅっ」
だが、笑い声とエクボの声がぐちゃぐちゃに頭の中に響いて、うまくいかない。
「助けて、エクボさん……っ」
新隆はざっと着物を整えて、ジャケットを胸に抱きながら、よろよろと自らエクボの部屋に向かった。

向かって、しまった。

新隆の部屋で、白百合の花弁が一片、はらりと堕ちた。

※

「えくぼ、さん……新隆です」
か細い声でエクボの部屋の前で名乗ると、慌てて襖が開く。
「どうした！？また何かあったか！？」
渋いヨモギ色の着流し姿のエクボが、おそらく登記の書類を書いていたのだろう、それを放り出して新隆に駆け寄ってきてくれている。
「エクボさん……っ」
新隆は自らその胸の中に崩れるように飛び込んだ。
「え！？ど、どうした！？」
新隆らしからぬ行動に戸惑いながらも、エクボは新隆を抱きしめる。
「じ、自分でしようとすると、あ、アイツらの、笑い声が、頭に響いて……っ」
「……っ、あの野郎共、本当にただじゃおかねぇ……」
唸るエクボの着物をきゅっと新隆がつかむ。
「だ、だから、その、抱いて、欲しくて……っ」
「新隆……」
媚薬に追い詰められて、これまで無体を働いてきた相手に縋らざるを得ない。そんな新隆の姿にエクボは危うさを感じる。
「新隆、これは全部媚薬のせいだ、そうだな？」
（壊れてくれるなよ）
祈りながらエクボは部屋に引き入れた新隆の着物を乱す。胸元をくつろげ、裾を広げた。
「……っん、びやく、の、せい……」

ほんとうに？

ざわざわと新隆の中で、罪の形をしたものが蠢く。
「あっ」

布団を引っ張り出したエクボがそっとその上に新隆を座らせる。
その動きだけでも、今の新隆にはつらい。
「はっ、はやくっ……♡」
「大丈夫だ。ちゃんと気持ち良くしてやる」
エクボは割開いた新隆の足の付け根に手を這わせ、直接的に快感を与える手淫を始めた。
「あっ！あ、あ、あ、ああああ！」
性器への強い刺激に、ビクビクと大げさなほど新隆は震える。
「やだっ、それ、キツ……あ……っ」
ぐりっとエクボが親指で鈴口をこねると、びゅるると新隆は射精した。
「あ……う……」
射精の一時的な解放感はすぐ過ぎ去って、ずん、と余計に腰に熱が溜まっていくのに新隆は唇を噛む。
「どうだ？少しは落ち着いたか？」
「そう……見えます……？」
またすぐに性器は立ち上がり、荒い息を吐く新隆に甘く睨まれて、エクボは目眩がした。
「いや……」
「抱いてくれって……言っただろお……っ」
新隆ははしたなく白足袋でエクボの逸物を着物の上からぐりぐりと刺激する。そこは完全に勃ち上がっていた。
「こらっ、やめろっ、分かったからっ」
「はぁっ♡は、うっ♡」
新隆は精液を指に絡めて自分で後ろをほぐす。犯される準備をしてしまう。
その光景に『これは媚薬のせい』とぶつぶつ言いながら、エクボはローションボトルを取り出して指に絡めて、新隆の代わりに準備した。
「あっ♡ゆびっ♡エクボの指、気持ちいいっ♡そこっ、トントンしてっ♡」
「……へいへい」
エクボという安心できる存在の前で、新隆の脳が媚薬に溶けてい

く。
エクボは愛しい新隆の人格を破壊していく悪魔の薬に、そっと歯噛みした。
「もう挿れてぇ……っ♡」
腰をくねらせながらねだる新隆に、エクボはゴムを取り出して手早く付ける。
「早くぅっ♡誠司さ……あ……」
本音が溢れた新隆の顔が、『マズった』と歪む。
「……はぁ」
ため息をつきながらも、ズブズブと心地よいアナルに自身を埋め込んでいくエクボは、新隆が自分を誠司の代わりにしたことに少し怒りながらも、安堵していた。
まだ壊れてはいない、と。
「……ごめんなさい」
「気にすんな」
ずっ、ずっ、と揺さぶると、快感で新隆の息が上がってくる。
「あっ、ん♡ごめ、ごめんなさい、誠司さん、ごめんなさいっ♡」
媚薬に負けて他の男を求めた。身体が満たされてくるとその事実が新隆を責め苛ましてくる。
「ゆるしてっ♡お願いっ♡エクボさ……あんっ！♡」
今日はイジメずにエクボは新隆に快感を与えてやる。
「エクボさんっ♡エク、エクボぉっ♡」
ダラダラと涙を流しながらエクボの名を呼ぶ新隆の姿に心がかき乱される。
「……なんだよ」
「あなたの気持ちを利用して……っ、ごめん、なさい……っ♡」
エクボの性器を受け入れながら。
新隆は、誠司とのセックスをなぞっている。
「……気にすんな」
苦い物がエクボの胃の中に落ちていく。散々手篭めにして、甘やかしもして、媚薬を散らす手伝いまでしても。
新隆の心は手に入らない。
『新隆はお前のものにはならない』

当主の声で、誠司の声で、エクボの頭の中に響いて、身体が跳ねた。
「あっ！♡」
うっかり深く打ち込んでしまって、新隆の性器からだらりと精がこぼれた。
「イっ……きます、あ、あ、イクぅ……っ♡」
ぶわ、と新隆の身体に鳥肌が立って、どこか苦しそうに顔をしかめる。
「あぁ……っ」
甘く掠れた声とともに内部がびくびくとうごめいて、たまらずエクボは吐精した。
「は……う……」
心地よい痺れに新隆はうっとりと浸るが、またすぐに媚薬が熱を持たせて来た。
「あ、んっ♡またイくっ♡エクボさぁんっ♡たす、助けてぇっ♡」
咥えてるだけで身体が絶頂するらしい。
「大丈夫だ。波に身を任せちまえ」
「あ……」
優しい手が新隆の頭を撫でる。
ざわ、と新隆の心が騒いだ。
その男らしい手に頬擦りしながら、新隆は繰り返される絶頂に耐える。
「あ♡あ♡あ♡……もういやだぁっ、イキたくないぃっ♡アクメ辛いぃっ♡ごめ、ごめんなさいぃっ、誠司さん、エクボさぁんっ♡」
「……もう謝るな。全部媚薬のせいだ。愛してるよ、新隆。だから俺のことは気にすんな」
優しく手に口付けてくる唇に、身体を穿つ熱さに。
きゅう、と新隆の胸が高鳴った。
「すき……」
驚いてエクボの動きが止まる。
「でも、俺、誠司のことも忘れられない……おれ、おれは、どうしたら」
「……今は何も悩むな。媚薬で色々おかしくなってんだ。何も悩ま

なくていい。熱を逃す事だけ考えてろ」
──ざまあみろ
エクボは当主や誠司に中指を立てたくなる。
今だけかもしれないが、揺らぐ新隆に、エクボは隠しきれない嬉しさを感じていた。
ここからは慎重に、狡猾に堕としていかなくてはいけない。誠司がやったように。優しく。誠実に。理解者を装って。
エクボは袂で口元を隠して、ニヤリと悪どく笑った。
「エクボさ……っ、まだ、足りない……っ」
「あー、自分で動ける方がいいかもな」
「ふぇ？」
新隆はエクボに引き起こされ、エクボの上にまたがる形にされる。いわゆる騎乗位だ。
「好きに動いていいぜ。自分の気持ちいい所に当てたらいい」
エクボはゴムを取り換えながら新隆に言う。
「あ……う……」
新隆は戸惑いながらも、膝立ちになってエクボの性器をつかむ。
ぐぷ、と泡立つローションの音を立てながら、その身にエクボを飲み込んだ。
「んっ……♡んっ、ん！？」
ゆらゆらと腰を揺らしていた新隆が、とある一点を掠めたエクボの性器に目を見開く。
「あっ♡あっ♡あ……♡ここ、きもちいい♡♡♡」
「おー、そこに当てるといい」
エクボの着物を乱しながら腹に手を当てて、新隆はぐぽっ、ぐぽっと浅い所への刺激を追いかけて腰を揺らすのに夢中になる。
「あはっ♡あは、あ、あー……っ♡」
うっとりとエクボの逸物を堪能する新隆が愛らしく、くらくらするほど色っぽかった。
「……すまん、俺様限界」
「え？」
ぱっとエクボが両手で新隆の膝を外側へ払う。
「あ゛っ！？」

新隆はエクボの上に落ちて、ずぷん、と逸物を根本まで咥え込まされた。
「ひどっ、あ、あぅっ♡あ♡あ♡あ♡」
そのままエクボは腰を使って新隆を突き上げる。
「エクボ……♡さん……っ♡」
その動きに合わせて、エクボの腹に手をついた新隆の腰が上下にくねる。
乱された着物から覗く胸の紅い性感帯が、ぷるぷるとエクボを誘った。
「酷く腫れてるじゃねえか」
きゅ、と摘むと、あぁっと堪らない声が新隆の口から漏れた。
「ちくびだめっ♡あいつらが、いじって、じんじんするからぁ……っ♡」
「それは誘ってる方の『だめ』だな？」
エクボは意地が悪そうに笑って、自由な両手で新隆の乳首をくりくりとイジってやる。
「ああぁダメダメダメっ、乳首でイくからぁっ♡♡♡」
「イっちまえよ」
「〜〜〜〜っ♡♡♡」
かく、と新隆の身体の力が抜けて、じゅぷん、と音をさせて奥までエクボを呑み込む。自分を追い詰めながら、彼は雷に打たれたかのような快感に襲われた。
「たまんない……っ♡」
媚薬に理性を焼かれて、新隆は倒れ伏したエクボの胸に頬を擦り寄せる。
「可愛いナァ、新隆。お前は可愛い」
それを目を細めてエクボは眺めていた。
「や、やめ……俺は可愛くないです……」
「……可愛いよ、俺の新隆」
「……っ、もっと……」
ハートが目に浮かんだ新隆が、エクボを見上げる。
「もっと、俺を可愛いって、言って……っ」
「──！」

エクボの理性も焼かれた。
エクボは身を起こして、新隆の足を持ち上げて押し倒す。
「あんまり可愛いのやめてくれねぇか？──めちゃくちゃにしたくなる」
「え……っ♡」
快楽への期待に、もはやエクボにされるがままの新隆が震える。
エクボは吐き出して不快になったゴムを外して、そのまま新隆の中に入った。
「あっ♡あっん♡そこぉっ、イイっ♡」
トロトロになった新隆がエクボは可愛くて仕方ない。
「愛してる、愛してるぜ、新隆」
「お……」
俺も、と言いかけて新隆が混乱する。誠司さんじゃない。これはだれ？俺を助けてくれたひと。

俺の××な人。

「あれ……♡わ、わかんなっ、わかんないっ♡エクボさん、もっと犯してぇっ♡♡俺の頭、馬鹿にしてぇっ♡♡」
「……いいぜ」
エクボは新隆の膝裏を持ち上げて、ぐっと奥まで犯せる種付けプレスの形にもっていった。
「んお゛っ♡あ゛あ゛あ゛っ♡」
新隆が舌を突き出して快感に耐える。
どちゅ、どちゅ、と体重をかけて上から犯されて、ひぃ、と新隆の喉から生理的な悲鳴が漏れた。
「誠司、誠司さっ……♡」
チッとエクボは舌打ちする。
「誠司じゃねーよ」
すぅ、と新隆の焦点がエクボに合って。
「エクボさん……♡」
ぐしゃぐしゃの顔で、ふわりと笑うから。
「……っ」

ぐわっとエクボに射精感が上がってくる。
「腹に出すぞっ、ぶっかけるからなっ」
普通の正常位に戻して、ピストンを速める。
「……ナカに出してぇっ♡」
がし、と新隆がぴくぴくと甘イキしながら足をエクボに絡めてくる。
いわゆるだいしゅきホールドというやつだ。
「ばっ……！俺様がせっかく外に出してやるっつってんのに……！！」
「エクボさん、好きですっ♡エクボさんの精液欲しいっ♡」
媚薬マジヤバい。
そうくらくらしながら、エクボは大量の精を新隆の奥に吐き出した。
「あ……っ♡中出しっ♡気持ちいっ♡中出しされてっ♡イくうっ♡♡♡」
その衝撃でじんわりと柔らかく、しかし深く新隆はドライオーガズムを味わった。
「すご……っ♡エクボさんのザーメンおいしいっ♡もっとお腹いっぱいにしてっ♡」
ぶち、とエクボの理性の糸が完全に切れた。
「……ぐっちゃぐちゃにしてやるよ」
「っあん♡」
抜かずに抽挿を再開する。嬉しそうに新隆の顔が笑みを浮かべる。
「んぁっ♡きもちぃっ、きもちいいっ♡♡♡こ、これは、媚薬のせいですからぁっ♡♡♡」
「わぁってるよ」
新隆はエクボの頭をぐいと抱き寄せる。
「俺を離さないでっ♡もっと愛してっ♡♡♡」
「……ああ」
「エクボさん……すきぃっ♡」
「……っ！」
「好きです、もっと俺をめちゃくちゃにしてぇ……っ♡」
──言われなくても。

エクボは新隆の足を持ち直し、性感帯をゴリゴリと性器でイジメてやった。
「あぁ──っ♡♡♡」
白い喉を晒して身体を逸らす新隆は。
そのまま朝まで、責め抜かれた。

※

ぼんやりと目を覚ました新隆は、自分がエクボの腕の中にいる事に驚愕する。
（えっ、あっ、昨日、俺、媚薬を飲まされて……っ）
混乱する新隆は、状況を把握しようと眼前のエクボの寝顔を見て、……全身を快楽に襲われた。
「ア、ァっ！？」
──身体が、この男から与えられた快感を憶えている。
「あぁああぁあっ♡♡♡」
びくびくびく、と何もされていないのにメスイキする身体に、新隆は混乱する。
まるで。
エクボの『メス』にされてしまったかのようで。
「ぃやっ、あぁっ……♡」
イイ……っ♡
全身がそう叫んでいるようで、新隆は翻弄される。
次第に絶頂は落ち着いてきたが、新隆の混乱した気持ちは落ち着かない。
エクボの腕から抜け出して、慌てて着物を探すが、襦袢しか見つからなかった。それほど部屋は荒れて、淫臭にまみれていた。
早朝だ、構わないだろう、と新隆は白い襦袢だけ身に付けてエクボの部屋から小走りに自分の部屋にかけ戻る。
襖を閉じて。
仏壇に駆け寄り、誠司の遺影を抱きしめた。
「あなた、愛しています。愛してる……」
少しずつ心が落ち着いてくる。

でも。
ひそりと、もう１人の自分が。

──助けに来てくれたのは、誠司じゃないぜ？

そう、囁いてきて。
「誠司さん……！」
心細さを打ち消すように、新隆はさらに強く遺影を抱きしめた。

※

いつもの時間に目覚めて、エクボは自分の着物の下敷きになっていた薄墨色の長着と、朱色の羽織を見つける。
「空蝉か。風流じゃねぇか」
そう言いながら、ニヤリと笑った。

※※※Ｋパート※※※

朝から大変だった。顔を見せるや否や、義母が義父やお手伝いを押しのけて、新隆に駆け寄ってきて大丈夫かと不安をあらわにする。
苦笑して心配をかけた詫びを入れてもそれはおさまることは無く、本家かかりつけの医者に検査をしてもらうようにと強く言われた。
そこまでしなくても良いと言ったのに、そのままあれよあれよという間に引き摺られるように病院へ連れて行かれ、怒涛の勢いで検査をした。
せっかく午前の早いうちにやることリストを詰めて気を紛らわそうとしていたのに、検査のおかげで時間は昼をまわり、あぁ、と新隆はため息をつく。
本家に、名家に嫁ぐのはこういうことなんだ、と。
「・・・正直面倒・・・とも言っていられないのか・・・」
誠司からその危険性について何も聞かされておらず、義母も義父もそのことについて触れようとはしなかった。唯一エクボが教えてくれた真実は、彼から施された無体によってその信憑性を新隆の中で欠き、結果自分の不注意が招いた事件が起きてしまった。そして。

「・・・またエクボさんに取られちゃったな・・・」
自身の不甲斐なさと、病院の検査疲れにまた大きくため息をつく。
誠司が自分のために選んだ羽織と長着。今頃エクボの部屋で淫らな記憶と共にぐちゃぐちゃになっていると思うと情けなくて天を仰ぎたくなる。

思い返すとなかなか酷い前日の出来事であった。
媚薬を盛られた後の記憶は脳みそを浮かされて所々しか覚えていないものの、終わりの見えない地獄のような快楽に突き落とされて、肉体を内側からも外側からも蹂躙されたことは忌々しい。
だけれども、そんな中で唯一、希望の光となって現れてくれたエクボに、どういうわけか胸を締め付けられるような想いを抱いてしまっていた。
自分には一生を誓った人がいて、その人のために人生を終えようとまで覚悟していたつもりだったが、それも今では不安定に積み上がった積み木の上に座っているようで、グラついて安定しない。
不純なのか否か、ついそこを考えてしまって、頭の中はぐるぐると巡って軽く目眩が起きそうだ。
「・・・あ」
病院から戻ってきて屋敷の中を彷徨い、気がつけば昨晩自分が縋ったエクボの部屋の前に立っていた。いつの間に覚えてしまったのだろうか。無意識のうちに歩みを進めた先にあるのが、彼の部屋だなんて。
引手をじっと見つめて考えあぐねていると、その襖が突然、からりと乾いた音を立てて開いた。
「ぉわ！」
「ヒィっ！」
二人とも、そこにお互いがいるなんて思わないので、襖一枚分の距離で驚嘆の声をあげる。心臓が胸を突き破って転げ落ちそうなほどにはびっくりした。
「おっ驚かせんじゃねぇ！」
「は、あ、すみません・・・！」
どくどくと鳴る心臓を抑えて息を整える。なんで俺はここにいるの

だろう、と疑問を持ちながら。
「大丈夫か？入りな」
「っ・・・」
「・・・なんもしねぇよ」
はぁ、と大きいため息をついて、エクボが身体を避けて入室を促す。危険性は無いと判断し、その言葉に甘えて入室して裾を払い、畳に着座する。そして、手をついて深く土下座をする。
「昨日は・・・その、ありがとうございました」
「おう。もう身体は大丈夫なのか」
羞恥に真っ赤になって俯きながらも一生懸命礼儀を尽くそうとする新隆に、エクボがぶっきらぼうに返事をする。
「はい、お陰様で。病院でも問題ないと言われたので奥様もご安心になられて」
「お袋が悪かったな。心配性だからよ」
かちり、とジッポで煙草に火をつけて燻らせる。いつも香る煙草の煙だった。
新隆は何かを決心したように顔をあげ、まだ少し俯きながらも腿の上で重ねた手をぎゅ、と握る。その翳りのある顔がやはり、ほんのりと色香を纏って、煙草の煙と相まり、美しい。
「あの、今日はお話があって、来ました」
辿々しく言う言葉に、緊張が垣間見える。普段の新隆なら、接客経験から口から生まれたとでも言わんばかりの流暢な喋りを繰り広げるので、これは相当だろうと見ていてわかる。
「なんだ、言ってみろ」
「・・・その・・・俺は、いえ私は」
「話しやすい方でいい。普段のお前でいいから」
エクボが諭すように柔らかく言うと、新隆が小さく息をついて、言葉を途切れ途切れに紡ぐ。
「・・・・・・俺は、エクボさんが、好き、です」
静かに見つめてくるエクボの眼差しが、新隆の心に熱く焦げつき、正座を組む足が思わずもぞりと震える。カチコミに来てくれた時の、あのほんのりと緑を含んだ力強い眼が、射る様に新隆を捉えて離さないのがわかる。

そして新隆も理解する。無意識にでも、エクボに伝えなければいけない想いを自身に秘めていた、という事実を。その想いがこの部屋へ足を向かわせたのだと。
「でも・・・誠司さんも好き、です。愛している」
その言葉を受けた眼差しの強さが少し和らいだのを肌身に感じる。ビリビリと伝わってきていたものが、ほんの少しだけだがフッと緩くなった。
「俺には、どちらかを選べと言われても、選べません。二人とも・・・好きだから・・・」
「そうかい」
「ごめんなさい」
食い気味にまた頭を下げて詫びを入れる新隆。
「昨晩のことは謝ります。あんなの・・・あなたの気持ちと身体を利用した自慰行為でしかない」
「おいおい・・・そこまで言うこたねぇだろ、俺様だって、その・・・」
「・・・？」
「気持ちよかったからな。愉しませてもらったよ、それなりにな」
「う・・・」
どんよりと更に顔を翳らせて、先ほどまでの色気はどこへやら。自分自身への嫌悪に眉を顰める新隆にエクボが煙草の灰を灰皿にたん、と落としながら言う。
「お前は自己肯定感が低すぎんだよ。好きなら好きでいいし、嫌なら嫌でかまわねぇ。昨日のことだってまぁ不本意だったとはいえ、気持ちよかっただろ」
「・・・それ聞くんですか。セクハラで訴えますよ、奥様に」
蜜色の半目でじとりと睨め付けるが、エクボは素知らぬ顔でひらりといなす。
「別に。言えばいいじゃねぇか。こういうのは犬も食わねぇ痴話喧嘩ってんだよ」
それに、とエクボも改まって姿勢を正し、新隆に向き直る。
「俺様もお前に詫びなきゃなんねぇんだ」
「え」

「お前に盛られた媚薬な、俺様も取引に関わってたんだ。人体実験をしたいと言われて断ってたんだが、それが新隆にきちまったってことだ」
面目ない、と言いながら煙草を吸い切って、灰皿に押し付ける。そして彼も畳に手をつき、土下座をしたのだった。
「この度は、九下部の騒動に巻き込み、それだけにとどまらず霊幻新隆様の心身に多大なる苦痛を招いてしまいましたこと、お詫びの申し上げようもございません」
「えっ、いや」
「誠に遺憾ながらあのような不埒者でも九下部の一部であり、また我々が裏で行なっている事柄の一つであることも事実でございます」
「・・・・・・」
「本件に関しましては、次期跡取りである私めが責任を持って処分を行わせていただきますため、何卒、何卒ご容赦賜りたく存じます」
「・・・やめて、ください・・・顔を上げてください・・・」
苦しげに眉を顰めて新隆がエクボの肩にそっと手を触れる。
「俺は、たぶんそんな貴方を好きになったんじゃない」
「・・・新隆・・・」
「お願いだから、謝んなよ・・・なぁ」
エクボの頭を胸に抱いて、両腕でそっと包み込む。ふわりと香る、白百合の芳香。
「エクボ」
頭上から柔らかく落とされる、彼の声に乗った自分の名前。鼓膜を通して心身に染み渡り、拗れてしまったドス黒い塊を溶かされていくような感覚がある。

あれ、俺様、こいつを堕とすつもりで演じていたのに。
なんだ、このザマは。

内側にざわめきを抱えつつも、エクボは顔をあげる。眼前にはくっきりとした二重の半目を苦しげに歪めた攻略対象の顔。

そのまま、口付けた。

静かに立ち上がり出て行こうとする新隆を、エクボが呼び止める。
振り返れば、彼が差し出す手元には脱ぎ散らかして身代に取られたと思っていた羽織と長着、そして。
「・・・指輪・・・」
銀に鈍く光る操が鎮座していた。だがそれはもう以前ほどの輝きを見せてはいない。
「返す。すまなかった」
「・・・・・・ありがとう、ございます」
新隆も、嬉しさと苦味をないまぜた様な微妙な顔をして、指輪を左手薬指へ嵌める。鈍い輝きが更に翳ったような気がしたが、気のせいだろうか。
「俺様はお前が好きだ。そのままのお前を愛してる」
「エクボさん・・・」
「だから悩むな。それでいい」
新隆の頬に無骨な手を添える。その体温と鼓動が伝わって、新隆の内側からぞくり、と快楽の灯火に火がつきそうになった。

このまま、また抱かれても、いいかもしれない、なんて。

「寛大なお心を賜り感謝申し上げます。お慕い・・・しております・・・」
軽く頭を下げて、エクボが見守る中、薄暗い廊下を自室へと歩みを進める。白足袋の床を滑る音が、嫌に大きく聞こえる気がした。

「はぁ・・・」
返してもらった羽織と長着を抱えて、誠司との夫婦部屋の襖を開ける。
室内にゆらりと香る、花の香り。
その香りの元を見れば、生けた白百合の大振りな花びらが全て舞い散り、その身を卓に投げていた。
「あぁ、散ってしまったのか」

その花はすでに花と呼べる形を保っておらず、一度着いたら二度と落とすことの叶わない花粉に塗れたおしべと、黄色くベタリと先端を色付かせるめしべがあらわになって、不埒に花瓶に差し込まれているのだった。
「残念だな、もう見納めか」
そう言いながら、その白百合だったものの太い茎をそろりと撫でる。

「綺麗に咲いてくれて、ありがとうな」

そう言って新隆は、その白百合を花瓶から、引き抜いた。

続